

たすかる／たすける

今回は、「たすかる」と「たすける」について見ていきたい。自動詞「たすかる」は3例ある。それぞれ文脈に即して見ていこう。

- このたびはたすけ一ちよにかゝるのも
わがみのためしかゝりたるうゑ (三号 44)
- たすけでもをかみきとふでいくてなし
うかがいたてゝいくでなければ (三号 45)
- このところよろつの事をときゝかす
神いちじよでむねのうちより (三号 46)
- わかるよふむねのうちよりしやんせよ
人たすけたらわがみたすかる (三号 47)

他動詞「たすける」は、「たすけ」という連用形名詞(例えば「流れる」に対する「流れ」など)というかたちで度々登場し、多くの場合「一条」(一ちよ、一ぢよ)と結合している。ここでも44で「たすけ一ちよ」と述べられている。

この箇所では、そうした「たすけ」の性質が示されているが、それはまず「我が身の試し」から始めると言われる。伝えるべき「たすけ」というのは、ただ言葉でのみ伝えるのではなく、「我が身」でその意味するところを証して伝えるということであろう。ただし、その「たすけ」というのは、当時一般的であった「拝み祈祷」でも「伺いを立てる」ことでもない。そうしたこれまでの様々な祈祷や、あるいは憑きものをおろすといったものにとらわれずに、まずは教祖の話すことを心底聞いて思案せよと付言された上で、「たすけ」というのは「人たすけたら我が身たすかる」というものだと論されている。

一言にしていえば、「たすけ」とは、「たすかる」だといえよう。他動詞「たすける」という場合、その作用が及ぶ対象・範囲が示唆されており、その名詞化である「たすけ」においてもやはりそれらが暗に示されている。それに対して、自動詞「たすかる」は、そうした対象や範囲よりも、その作用そのものを表している。こうした自動詞・他動詞の文法的な性質からいえば、「人たすけたら我が身たすかる」というのは、「たすけ」の対象が「人」であるとき、「我が身」が「たすかる」ことそれ自体になる、ということの意味している。

このことを「人」と「我が身」との対比でいえば、47で「たすけ」の対象が「人」と強調しているのは、「拝み祈祷」でも「伺いを立てる」といった従来の「たすけ」の対象が「我が身」であることを暗示している。しかし、そうした「たすけ」の対象としての「我が身」は、「たすかる」主体として成り立たない。それに対して、「たすけ」の対象を「人」として捉えるときに、自動詞的な意味での「たすかる」が「我が身」を主体として作動してくるのである。「我が身」を「たすける」というのは、厳密な意味で成り立たない。それは「おさづけの理」が自分自身の病に対して取り次げないことに端的に示されている。

ただし、ここで注意すべきは、そうして「たすかる」主体は「我が身」と述べられているのに対して、「たすけ」(「たすける」)の主体は厳密には明示されていないという点である。おそらく、「たすけ」の主体は、第一に親神であろう。しかし、「たすかる」主体が「我が身」であるというとき、その主体は同時に「人」を「たすける」主体でもあるはずなので、「たすけ」の主体は人間ということにもなる。つまり、「たすけ」の主体として親

神と人間が重なっていくことに応じて、人間は「たすかる」主体へと近づいていくのではないか。こうした「たすけ」をめぐる神人の重なりを、44の「我が身」や、46の「神一条」という言葉で示されているのだと考えられる。

- にちへにはやくつとめをせきこめよ
いかなるなんもみなのがれるで (十号 19)
- とのよふなむつかしくなるやまいでも
つとめ一ぢよてみなたすかるで (十号 20)
- つとめでもどふゆうつとめするならば
かんろふだいのつとめいちぢよ (十号 21)

ここでは「たすかる」筋道が、具体的に「つとめ一条」と述べられている。それは手段を意味する各助詞「で(て)」で示されている。ここでの「たすかる」主体は「難しい病」(病者)である。ちなみに19での「いかなる難(災難)」に関しては、「のがれる」と自動詞的に述べられている。難しい病を持つ者であっても、ただ一条に「つとめ」に参画することで、その者自身に「たすかる」が作動するのであろう。

- あれいでこらほどなにもすきやかに
たすかる事をはやくしりたら (十一号 33)
- それしらずどふどいなさすこのとこで
よふぢよさしてをことをもたで (十一号 34)
- こんな事はやくしりたる事ならば
せつなみもなししんばいもなし (十一号 35)
- にんけんハあぎないものであるからに
月日ゆられる事をそむいた (十一号 36)

『注釈』によれば、この箇所の背景にはこかん様の事情がある。すなわち、こかん様が樺本の樞本家に出入りしていることは親神の意にかなわないことだったが、周囲の情もあって、お屋敷に留まることがなかなかできずに、ついこかん様は身上になってしまわれたのである。

「あれいで」の「あれ」は、「あの者」、つまりこかん様を指す(『おふでさき通訳』では「あれまあ」と感嘆語のように解釈している)。「いで」は「去ぬ・往ぬ」で「帰る」。以上から、33は「こかん様がお屋敷に帰って、これほどすっきりとたすかることを知っていたならば」と解される。「たすかる」ということに注目すると、その主体はこかん様であり、敷衍すると病者とも捉えられよう。そうした病体のこかん様が「たすかる」のは、「お屋敷に帰る」こと、すなわち、親神の思召通りにするということといえよう。

さて、こうした3例の「たすかる」を総合的に考えると、自動詞的におのずと「たすかる」というのは、「たすけ」の一つの特徴でもある。すなわち、「我が身」ではなく「人」を対象に据えるような「たすけ」の主体は同時に「たすかる」の主体であり、逆にいえば、「我が身」が「たすかる」ためには、「人」への「たすけ」、すなわち「たすけ一条」が必要となる。また、「たすかる」には、「つとめ一条」がその手立てであるとも示される。したがって、「つとめ一条」というのは、「我が身」を「たすける」為になされるのではなく、「人」を「たすけて」、「我が身」が「たすかる」為になされるものであろう。そこで、親神はそうした「つとめ」の完成に向けていろいろと人材を育てるのであるが、十一号ではその思いに沿い切るということが「たすかる」道であるということも示されている。